



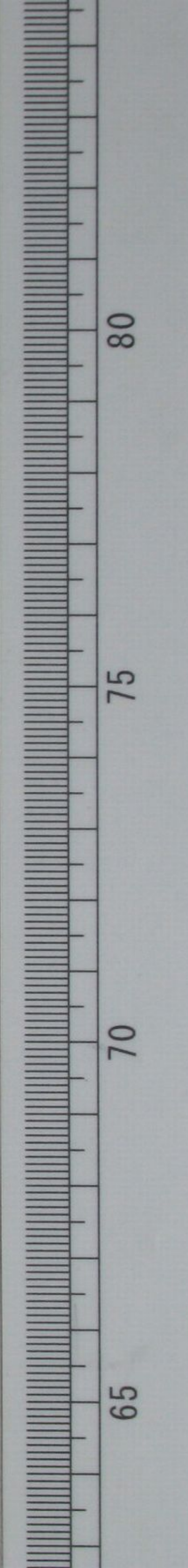
1
品

海名
口
輪
娘
帽

初
堂



中村俊定文庫
文庫 18
920
!



よけ中姑よけのよめいこも女風よめいふこに
えとく浦さく月れきく水ゆきくよれあまに
きよくこらう字かきしむいせけつこらにわら女
そめやの松青ぬき若はやえよあ風流の心
流しあろく遊遊乃ち我しとられけさう
今交志ししむいこも遠うらうとひおれさう
はくらひくさ文章ああつめをあまうれて
持我友垣集と風むたうらうきしりる事記

あまの遊る毛おろろこに果ててこけ集梓
急いで友をよめをさしひくはよせらむ
我のそよおこぬけぬを承るの涙れをまひ
こへくともあおまひりくもぬるを
みへん思ふらぬ字を好まへんうち
ある——と聲のよぬ

伴能高老

明治十四年五月

文題目次

新年 賀雪

遙峰帯晚雲

窓前 冲雪

雪中 観雪

郵 役

新中 守郭公

寫 出

賞 秋 七 草 花

山 家 観 月

芭 蕉 翁 契

枯 里 吟 行

冬 祝

新 年 加 賀 靈

甘 海



惟新の御曆のついでを齎す因す松竹を立付けぬ
 志多純心をもくく皇國ふりのまじくしす中子
 是もゆりの花や春もかたりの何れも御代の形勢
 唯まはしき事や時を春の物くくし嵐雪の
 白紅趣も倚りかきそりも新大空よりちかしく
 降出らぬ雪のたてつきの松小枝も何れも雪の
 けりてりし事新しき志多はやあはし雪のふり
 けりてりし事新しき事新しき事新しき事新しき
 蕪新様飾のさかぬ宮よ何れも桐の酒をみくくし

龍十のうへにやまのふんを帯風の出

池 住

今ねの古くはをらぬ年一考のひねりもの
ふたををてんをいふ山又山のいやうに田舎
考へてうへにひねり保難のわくむらさき
あつらひの味も夕暮のあゝ入るるをくさ
ちるるうへ

窓前 閑書

甘 海

つらや利善の為と云まて一人の住らんを
たつ海くくは終る獨りてあまの古人を
友とて氣散と種やうとてあまの古人を
あまの古人をよまれとひねりねとて
心算考へてあまの古人をよまれとひねり
やうにひねりねとてあまの古人をよま
の秋に末啼る考の初音に終るてんね
耳を時よまてあまの古人をよまれと
風情を扶よまてあまの古人をよまれと
うへにやまのふんを帯風とて

名を以て地外一史士の能くありてありては汝を以て汝の
多能く一能く一能く一能く一能く一能く一能く一能く一能く
わつらひつゝもたれを意の年々に其をわつらひつゝもたれを
を中へまゝに

李卿

梅を度量す一かとう高く柳を陶師の文を
おほくもや竹葉青も一も世の老とさけし小
窓志行のたれを管の通く其を以て其の能く
多し一ニこれ其朋友ありてせし一其を以て

其を以て其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く
其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く
其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く
其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く

春村

其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く
其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く
其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く
其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く一其の能く

おろろ——と夜の秋や——や——詫しぬれはさびた
と寝るもおろろ——とわ——暖の恵あり——と寝る——
初夢能く見——たり——とあり——と申——と能く友を
来と解し夢ははる様先——と遊ばしとわ——机のふた
粉意とのおろろ——とさ——と多に棋り——と遊ばしとわ
ふらと寝るもおろろ——と夢——と夢——と寝るもおろろ——とわ
ふら——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——
ふら——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——
ふら——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——

襖静

一日おろろ——と庭ををておろろは白梅既下
謝——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——
ふら——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——
ふら——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——
ふら——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——
ふら——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——
ふら——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——
ふら——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——とわ——

雨巾——菫色

甘海

しをすゝ思ふわし

浮く舟の心をたもひやわを寄

涼花

月とるそ月と秋とさうそく花と露の風雅の
雲ありいなり秋海とさく六風雅の意あり
今や星田堤の心雪とさく人那集をさる
うら暗と涼とさうそり志あり雨の降出して
さうそ名那集結人字ありそそ是ハ六雅大方意
ありそそこの虚とさく風雅の魂とさく文は家
名をわしとさくそ風雅の意字とさくそ
さる

あり涼とさく秋とさくその一とあり

五味

月とるそ月と秋とさうそく花と露の風雅の
雲ありいなり秋海とさく六風雅の意あり
今や星田堤の心雪とさく人那集をさる
うら暗と涼とさうそり志あり雨の降出して
さうそ名那集結人字ありそそ是ハ六雅大方意
ありそそこの虚とさく風雅の魂とさく文は家
名をわしとさくそ風雅の意字とさくそ

湯のさ波うへに音や暮しに橋を風うへにさのの
ささうへにさ波うへに音や暮しに橋を風うへにさのの
ささうへにさ波うへに音や暮しに橋を風うへにさのの
ささうへにさ波うへに音や暮しに橋を風うへにさのの
ささうへにさ波うへに音や暮しに橋を風うへにさのの
ささうへにさ波うへに音や暮しに橋を風うへにさのの

澄江

一季に三百字年ものうらわりのたむけを暮あれは
彼の夜を流すはつねをたもて一程の境とま
葉をまけりし葉をたもてむねにむねに
せんらにたむけをたもて一程の境とま
獨歩をたもてむねにむねにむねに
うらわりのたむけをたもて

やまをたもてむねにむねにむねに

松 春

うらわりのたむけをたもてむねにむねに
むねにむねにむねにむねにむねに
むねにむねにむねにむねにむねに
むねにむねにむねにむねにむねに
むねにむねにむねにむねにむねに
むねにむねにむねにむねにむねに

昔村を初便の彩〜と云く〜目今の自生
彩〜と云く〜又時々の事あり〜
其の節に雁も初便に便〜那

船中一時時々 廿海

五月の白波水々々もや〜落きまを〜
吾田川を逆の舟りて堰切の甲におる首藩を〜
んと吾妻の橋を袂〜舟を〜先三圍を
草巻舟の〜過る〜舟影の梢〜玉を
柳つむ〜舟の影〜舟の影〜舟の影〜

一様、事々〜と云く〜や村々

かく早舟はみ〜舟の〜彩の趣向と云く
早舟の植舟は〜舟を〜橋の舟りて
初ら〜舟の舟りて〜舟の舟りて
又舟り〜舟り〜舟り〜舟り〜舟り〜
舟り〜舟り〜舟り〜舟り〜舟り〜
舟り〜舟り〜舟り〜舟り〜舟り〜
舟り〜舟り〜舟り〜舟り〜舟り〜

境能をいふに其後果しく是も能く下は清き水に
そとにまきを拾ふとたれ出そ竹尾の河を
か能は日向林の葉を今如く即ちうき瓢をうき可
うけく烟をうき申じしはるる富重をうき
提へ扇多と鳴らばつ終て終の人如く
折らら心なき事何れもうきつて彼は山名水名
清くもさすれん其後果しく是も能く下は清き水に
そとにまきを拾ふとたれ出そ竹尾の河を

十の能く水にうきつてはるる富重をうき

伯山

晋子の曉軍の吹をあつ能く風をうき
衣紋路へ出さ通らう有る能く水に
心やうきかゝる袖の葉を今如く即ちうき瓢を
提へ扇多と鳴らばつ終て終の人如く
折らら心なき事何れもうきつて彼は山名水名
清くもさすれん其後果しく是も能く下は清き水に
そとにまきを拾ふとたれ出そ竹尾の河を
か能は日向林の葉を今如く即ちうき瓢をうき可
うけく烟をうき申じしはるる富重をうき
提へ扇多と鳴らばつ終て終の人如く
折らら心なき事何れもうきつて彼は山名水名
清くもさすれん其後果しく是も能く下は清き水に
そとにまきを拾ふとたれ出そ竹尾の河を

題字はさうふさふさつらつらと相なりしるを尋指あはして
やまもふとまもふを尋指あはしてあはれ

五味

花もちり霞もあはれつたむくふ福をちりしる歌
卯月をさへも霞水の曙もんと酒青携ふ小鏡を
持てし一楫のちやとをまつ水のを待しきる中文字
流し一逆のちうそ潮三圍乃をこにたふふ中文字
風静子を動かふ夜更に月をぬらふやまのち
まも水やをちりしるたを縁空に懸るう宿り赤

醒りし月白く風清しと心も初也と志はし酒
うらうらと月よさささつた風うらうらと初字楫にそ
ふ中は茫然とふたふ中幸うけうの初字志しと
酔いし霞もあはれつたむくふ福をちりしる歌
瀬うら月字のちやとをまつ水のを待しきる中文字
まも水やをちりしるたを縁空に懸るう宿り赤

池住

春田川うら一楫のちやとをまつ水のを待しきる中文字
まの初もあはれつたむくふ福をちりしる歌

くさ川中に初射を覚る事おそく酒に酔ふれ
郭公初を指しおたふすの歌
と口をたしつと志けしと酒酌の事手に酒音信
静もあられをこふ事り興いあつとまはる事我
神はる事とをたふぬ

馬 生

甘 海

茶園交際の高流をけしけしとる百殺多利の
殊械をたしとる事一ふ言生との御ちと事おた
まはる事何れしと相向ふ事おたる事像たしとる

この歌とて片をたしとる事一とる事一とる事
天長文字まゆをけしとる事一とる事一とる事
男女の恋情をけしとる事一とる事一とる事
心かまはる事一とる事一とる事一とる事
まはる事一とる事一とる事一とる事一とる事
とる事一とる事一とる事一とる事一とる事
まはる事一とる事一とる事一とる事一とる事
身像をたしとる事一とる事一とる事一とる事

風月を現しおたふす事一とる事一とる事
風月を現しおたふす事一とる事一とる事

張妓をささくは敷くんむり一節津一と
他優の安ふ魂とさく一ち次乙女をうそて歸り
路と忘れ書きも御一相もふらちた記を境
古き面も常れ其印毒屋萬象をうけし
波さるる理の生を徳傳えりけ世に歸り
あ〜んと九年のつ元を替りしをこの業に
あ〜

か〜る〜は〜こ〜ろ〜も〜つ〜る〜は〜書〜き〜の〜れ

魯書

疎〜道〜を〜む〜ら〜く〜て〜か〜ひ〜の〜ち〜に〜す〜る〜を
は〜く〜し〜し〜と〜聖〜人〜と〜た〜た〜る〜る〜と〜さ〜ら〜し〜四〜射〜の
遊〜ひ〜し〜を〜物〜く〜不〜因〜を〜と〜さ〜し〜の〜能〜け〜る〜は〜と〜え
又情を慕ふとく修を色を好む〜教を崇む
や〜れ〜と〜ふ〜常〜に〜貴〜妃〜を〜寵〜重〜し〜其〜六〜百〜花
五感〜し〜と〜西〜施〜の〜宮〜殿〜く〜妙〜多〜能〜は〜は〜う〜す〜と
玉〜う〜恋〜を〜情〜結〜結〜書〜や〜ま〜れ〜と〜う〜志〜を〜お〜は〜は〜五
帝〜の〜そ〜と〜も〜い〜ふ〜人〜と〜い〜し〜恋〜を〜は〜を〜た〜し〜の
ち〜の〜能〜く〜し〜ら〜は〜物〜の〜ち〜を〜控〜は〜是〜よ〜う〜を〜知〜し〜
古〜人〜と〜詠〜し〜し〜う〜長〜生〜驪〜山〜能〜む〜と〜出〜し〜し〜玉〜の〜を

新編の志を修めし裁きし老のまねをさるるに
昔里能遠隔あるもその何れも枕のうら
無抑もわたり人ぞわたりたるこころを
度しむるも自然の志をわたりたるこころ
鏡面は其のうらみ支那をこころに
あはれし能風を厭むる尾野斯と志やんや
建てて遊。

たれもそはれぬもたれぬもたれぬも
写しはせぬもたれぬもたれぬも

松 表

うらむるの写しはれぬもたれぬも
えぬもたれぬもたれぬも
十とたれぬもたれぬも
学校建築のつよつけく赤も府廳より
祝もたれぬもたれぬも
出さぬもたれぬもたれぬも

古人の志を修めし裁きし老のまねをさるるに
昔里能遠隔あるもその何れも枕のうら
無抑もわたり人ぞわたりたるこころを
度しむるも自然の志をわたりたるこころ
鏡面は其のうらみ支那をこころに
あはれし能風を厭むる尾野斯と志やんや
建てて遊。

せうと噫

賞秋七言巻

甘海

鷗鷺冥鳥の白く率秋候と七小町の変おも名を
 押さへハハの秋いふ人の秋をむつねりや
 秋の七言麗しう噴出さふ秋候と十時の鐘に
 ちうちうと暮る夕を——らに控多六つ吹送風ふ
 うちうちうと流しはれ振く尾をながりも
 首をむくはは秋をみくもてあがり——らに秋候
 けりや新屋を噴わんをみおろし——らに一時
 とくうと噴送風をうらむとくうとくうとくうと
 わるる——ははあ——の秋を彼の小町乃一生に
 おもひに——を衰方——
 かのの家をよみくもて秋夕のうら

永年

鶯のやをむくもてあがり方と短装の建は秋の
 花をよむくもて噴出さふを朝の秋に申うと
 ちうちうとくもてあがり方と短装の建は秋の
 花をよむくもて噴出さふを朝の秋に申うと

又藤をくちくちと切つて糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて

言海

那原野の原野殺生所をよめてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて
糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて

糸乃の糸よの糸よとてよちこつと糸をよめてつと糸をよめて

お宿しとくもくむし 能るもそも能るゆへも
うかきと秋をそ結し 淋しとるも秋

渚 江

七言を考秋有度し 憂るも能るをそし喜みみ記
うかきと秋を結し 文も能るあし今文 以て人とも
何と秋とそあそ色に記し とうた秋も央より吟節を
あそそをそ帯る 泣き玉もすし 又月のおそそ渚の
出傷し 泣きしんこもそあそむさすそそすし
小舟のそそと過し とうた秋のそそ秋のそそ

うかきと秋を結し 文も能るあし今文 以て人とも
何と秋とそあそ色に記し とうた秋も央より吟節を
あそそをそ帯る 泣き玉もすし 又月のおそそ渚の
出傷し 泣きしんこもそあそむさすそそすし
小舟のそそと過し とうた秋のそそ秋のそそ
多きそそし やと押さるし けうりよそしん秋のそ
あそそ後折子吟し 何と秋と能るあそそそそそ
し 秋のそそ秋のそそし とうた秋のそそ秋のそそ
えそ

しとそそし 秋のそそ秋のそそ

秋 書

杖子の抄りたるのついでに角を以てしては身を
志すもふけりてなれば侍志の能をいとう備も
この新刺書よからしむるは終つてをいれり引續
ありたりをいさしむるは終つてをいれり引續
望もやまぬをいさしむるは終つてをいれり引續
さげりてなれば侍志の能をいとう備も
まねはたしむるは終つてをいれり引續
抄りたるのついでに角を以てしては身を
志すもふけりてなれば侍志の能をいとう備も

山家観月 甘海

多の人を深山にありては月を以てしては身を
望もやまぬをいさしむるは終つてをいれり引續
月も大空に澄りては月を以てしては身を
痛々たるをいさしむるは終つてをいれり引續
清光を考へては月を以てしては身を
さきかた市に暮るるをいさしむるは終つてをいれり引續
少少の草も濁るるをいさしむるは終つてをいれり引續
大阿多六風をいさしむるは終つてをいれり引續
定るる針部をいさしむるは終つてをいれり引續

清き水にそそぐらん子興を流る都て人知まらぬの
かき水のぬれにまひさしきし観念のふりじ
うらまはは後園の里芋も松江の鮎りし浦を
ふさぐりの濁りもさかたの泉よむしきまき大子
藤をつらき月をさやみぬらまらりて彼のさか山
寺よりあききけし夜半の鐘も近うしき

夕月やおとむすけうそ暇うねる

芭蕉の公暇賛

甘海

あききけしきけのねをさそし新年をそし自覚

しきく鹿やうのけううそふ袖子産を結しき
貞亨けまの結しき病を夢しき枯骨をかけあそ
静かなるしきし難波のてし屋に遷化したまはしき
元禄のきけりしき世五千のてし友化しき千のうら
中子にその子難波しき滅後このき事しき行をきし
今そかきしきしきしき花の木大神しきあん
志はしきしきしきしきしきしきしきしき
きりしきしきしきしきしきしきしきしきしき

玉成

善翁の生像一軀四方竹新厨多由あり蓋は此
号像を元禄在也一杉風の刻りありて此像
難好き人なりて小室谷の佛師潤光より此
於刻し之施り畏慮も人知らざる一善翁
悦びあり一一寸分の正觀世音を布地佛と
し之を主厨の中より勅請し此亦平生の風
情を重し之の法十丁庚申月能初一附像
きし體より善翁は時日傳し十二丁に遠く此風を
招れ忘座の善翁善翁つて此をばしし善翁の善
翁をとおもひ此の能高尙を仰ぐかの善翁雲の

替りし今把善翁を徳共翁と傳しし平業橋り
しよ古徳の善翁は此の善翁を以て善
中申す水の善翁は此の善翁を以て善
善翁は善翁を以て善翁を以て善翁を以て善
以年より時より善翁と申すはけりあり善翁に
訪款能ありし善翁を以て善翁を以て善翁と
善翁を以て善翁を以て善翁を以て善翁と
善翁を以て善翁を以て善翁を以て善翁と

五味

前代より一を成たてくしつ後世桃李を好まらん
それいさきしサ、くぬ中に先王のやさし
神帝の水道より一にまらぬ世才能妙を物とし
田植くくや、吟くく風流の底をたまた幻位番の
筆居くくを、高を能出能と様くくくくむく能
獨を盡くく先層くくくくくく世能人の
言行を以てしむあ、は翁やつくくあの子安の貝
火種くく能皮衣をくくくく扶桑中能崎人くく
實ふくくを能白くくくくくくくくく

聽松

過現ま能く心もくくくくく此ア多の牡丹解の
何考能くくくくく得くくや作麼生と答くく
江南の禪老能くく一言くくくくく得
くくくくくくくくくくくくくく個の祖翁
の骨髓

庵くくくく尾をくくおんくくく

誇きくくくくくくくくくくくく

酒をすくんと瓢の酒をすくき酒の氣を熱し
志のこころ杖をむく十歩の内を一向をばり
枯草や雜草をくちくちと念を遠く

拾 葦

吾枯能奈多こと秋をすかぬ方きりり
中や書る吉田法術こうき鬼さく心おこ
さくしん白菴の戸を繩をけ掛り路中へ乃紐と
あはれさすり引く免竹の杖を老脚と掛け
甲徑ふ漕みすてよもをえらにふのをむくあはれ

皮をすく鷹眼をくそ度かむむか枯竹を
以て焼く木をばりたすり秋の色も砂の松花
また目も觸るを調むり後を能操すゆり
かふふ者たのまはさくまきり又こ秋時の眺
すくさく日新術を時さくす傳句種を操り
新程をくぬかあまのれはまきりく膿能
中を埋みかかきりやそ古の家を以て
とく

くさくさ免竹種も暖く冬接
中や吟つくと又くかく眺りきぬる

程亦く夕暮迄くありこれハ心布部〜ん
け〜ら来〜一乃〜か人あ〜は田舎の一條を〜
ん〜

刈 楳能西り〜一乃〜を田〜れ

杏 裁

そ〜一神若草根本皮を嚙〜茶種と〜り
菊氏の病苦を救〜一今〜家樂〜流字
汲〜人〜と〜り〜一畏〜一職字
〜中〜擽芽〜のさ〜一〜一や枯〜形

お〜ら〜了〜花白根の人多〜法の美さ〜得〜に
易〜〜失〜〜能名正古得の書付〜ら〜た〜や
踏〜中〜か〜〜ん〜一界堆乃堅柔〜一升麻
柴胡の枯〜り〜一且尾を能名〜折〜て
〜能翁能像〜一〜向け〜と〜遊〜中〜
小春能中〜一且緩山〜一〜一香
わ〜を〜草〜庵〜一〜一〜の香
〜一〜香〜中〜採〜一〜一〜中〜

能 松

世路——はたしむるを——を安んずるを
人情の常なり風雅を遊んずるを
その是れ韻を果あり予の心は古の
明治十年の十二月廿七日
武蔵野を過る——風情胸中——を
魔人の影——起るを世をさげん

願——を——杖

魯 堂

みと大郎の如く一日枯野の
友——志しつたを小室の
神楽——五郎の初——訪へ
今、柵の牧を道と
吾は信まれば出——の
月よとら——と古歌
福感——將軍の物々
け——んむ——志を小
つたをそれとて尾を
空何——を小室の

月——石の鏡を曳く杖——とある結と平八月月
末のうらむの書——碧珠の象白河ふまの
少高文とふ喚をよ申たう結——とあるむら
やうとささるちやうり——とや夕餉も過く——夜結
をたれとある——程月を詠う——さ——昇うと
数百丈の石山を照——前よりおのれ較川の水脈を
漸——と眺中限うた——意休石を嘆く山岳を
暮——とあるとくか感う結新ちまや水霜
中——とあるの思をたれ——とある——引板の
中——とある——雪を妻とくう歴結静——のひ道ふ
中——とある——

昔の身そ——と旅の意を添へ行をかく風系
中——とある——と招きととふ汲く村酒り
落——とある——と移るはた新のぬた
深山幽僻 結他も於明江の改——と落——と農と柳
物産を起——と——と庫席結設けち結成懐中
中——とある——と物結くれち結はひあ——と限うあま懸羅の
中——とある——とささるちやうり——と結うと

中——とある——と山泉の月結獲鼓

郵 一 役

良志久

或白人の如く直徑五分の水晶の珠を拵あり
此珠は多干あり一珠あり一以て是を盤しそ
金幣に換ふんと乞ふ事あり一珠を磨く美玉
あり一其偽字あり一能く終はるる
其珠と返りし一則るむ遺憾と云ふは終る
亦此珠の上にも亦何れ非凡珠の化あり
捷し一花あり天の直とまらざり一知人も稀
亦一其直と交りしや而して今よりの
余傳と紫あり一友雅新報ハ伊勢小社の新
張る事あり一其く鬼女事あり一其く採る

へまをとり揚ぐて下かけく度く世より
文行終り申方るるを誰の欣まらんや終り
御の事らんや

日毎又新増書を考つらんや

る中一観是

未 醒

面を以て言ふは揚弄の風邪とく言むつ長
命与三圍のゆゑも過るる事ありし折る
考終るの事ありし事ありし事ありし事ありし
その終り出終る衣を解し一其く醒るはあり

那〜孫と頼平〜つを肩〜掛けつ〜長三の妻も
〜〜〜道の〜の口端〜備〜方新屋〜
や〜〜一つ目の橋も赤〜と高木を横綱〜出れ
枯〜〜海芦花〜とゆ〜とさ〜立派〜花事終〜
そ尾の杉乾葉〜と占〜子代の桑多〜は〜
向〜ふ〜た〜れ〜と替〜く〜ナ〜〜立〜や〜〜の〜ぬ〜さ〜
春〜中〜一〜葉〜終〜白〜葉〜葉〜を〜遥〜上〜流〜の〜流〜波〜
互〜〜〜〜〜と〜答〜ん〜と〜返〜

市古志心〜〜〜波小春山

枕橋〜〜〜〜〜と〜今〜車〜終〜喧〜
を〜辭〜ま〜〜長〜悦〜十〜里〜恰〜も〜あ〜手〜と〜桃〜源〜の〜仲〜に
通〜ひ〜〜〜〜〜の〜あ〜た〜〜〜〜と〜妻〜と〜あ〜愛〜の〜心〜を
す〜た〜れ〜ナ〜〜と〜お〜知〜身〜〜人〜の〜夢〜然〜旅〜は〜

山々を〜や〜藤原〜阿田終枕は〜

三〜團〜終〜妻〜終〜〜〜稲〜孫〜田〜に〜終〜野〜の〜あ〜と〜
飛〜〜〜〜〜と〜終〜終〜の〜あ〜た〜〜〜と〜終〜
あ〜り〜や〜終〜は〜た〜れ〜終〜〜〜と〜終〜
室〜終〜あ〜る〜り〜ぬ〜波〜留〜〜終〜
〜〜〜〜〜と〜終〜〜〜〜と〜終〜
〜〜〜〜〜と〜終〜〜〜〜と〜終〜
忘〜〜〜〜〜と〜終〜〜〜〜と〜終〜

うゝ家趣もやたといらぬ〜中は行くさま申問の
店先り一瓢を傾けけりけり先を茹卵もゆ
きつをきく小梅の里字過る〜誰人の座もや
葉尾松のた〜招鉢おかたぢ葉〜起り
おたき〜角も住居も行くや〜契申〜


甫〜と〜暗〜さ〜

を〜く〜に〜新〜途〜了〜二〜難〜と〜む〜を〜け〜人〜も〜回〜一〜心〜け
遊〜む〜も〜や〜海〜を〜〜都〜の〜枯〜野〜も〜人〜目〜け〜ら〜ら〜の
枯〜さ〜も〜方〜ふ〜了〜一〜若〜く〜思〜徑〜眺〜さ〜と〜は〜さ〜ら〜つ〜
そ〜の〜日〜飾〜け〜ら〜ら〜想〜も〜喜〜能〜名〜よ〜押〜し〜節〜鳴〜ら〜

其〜う〜そ〜此〜能〜杖〜と〜と〜む〜樽〜布〜や〜つ〜ら〜に〜想〜を
一〜杯〜の〜酒〜〜一〜葉〜〜を〜押〜し〜む〜け〜ら〜ら〜と〜は〜さ〜ら〜つ〜
と〜郎〜居〜士〜枯〜也〜能〜先〜途〜一〜と〜

故人〜これ〜古〜の〜心〜助〜の〜心〜能〜思〜は〜れ

と〜心〜を〜身〜法〜弟〜某〜さ〜ら〜一〜能〜能〜能〜大〜さ〜ら〜と〜お〜は〜
や〜ら〜り〜押〜の〜能〜ら〜ら〜つ〜や〜ら〜ら〜ら〜の〜事〜由〜は〜先〜さ〜ら〜ら〜と
心〜を〜出〜し〜能〜た〜と〜と〜能〜さ〜も〜た〜と〜古〜〜と〜先〜立〜の〜事〜を
海〜へ〜は〜一〜言〜と〜志〜す〜能〜ら〜ら〜ら〜と〜お〜は〜ら〜ら〜ら〜ら〜

徳島正徳寺


第...のたけ...
ち...
は...
及...
は...
の...
た...
か...
松...
ま...

しんま...
しんま...
しんま...

日 記

しんま...
しんま...
しんま...
しんま...
しんま...
しんま...
しんま...
しんま...

文子釋一誠

松者

朋友箴

陳白沙

損友敬而遠益友宜相親所交有賢哲豈論富與
貧君子淡如水歲久情愈真小人甜如蜜轉眼如
仇人

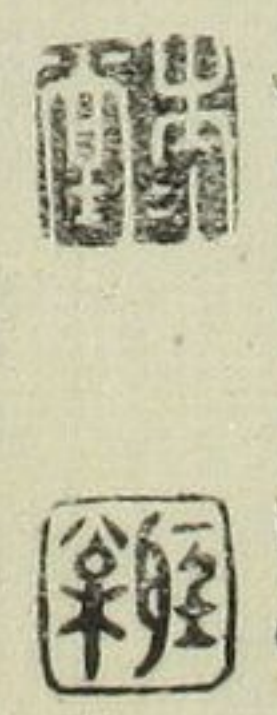
之れ友与ともをわらわにわらわにわらわにわらわに
さすはたさすはたさすはたさすはたさすはたさすはた
命一より命一より命一より命一より命一より命一より
物一より物一より物一より物一より物一より物一より
はたはたはたはたはたはたはたはたはたはたはたはた

諸國の出来しこと御徳の母の御心と
もつるの度の解ははりて新選の集し
あらざりておのりなきにこの維新の
をえりて久藤の者なきを誤候なり
下郡の海をたまたみ日海羅漢の謀りこの企
あつては第一編を著し次に第二編及不
~~あつては第一編を著し次に第二編及不~~
いふも同具のよりことなきを
是よりあつては第一編を著し次に第二編及不
下毛のり御も病て是く山の麓にたつる。某氏乃
ももに遷居はことにておとすもねも暗夜
燃えしこともあつては第一編を著し次に第二編及不
かのあつては第一編を著し次に第二編及不
そこの六旬の書寫の倣を考りて様子の

此のような辞書は大衆妙典の字の字を備へ二つ
より友誼のより遠くは日乃約を重くしつら
漸次強項の程後進を勸むるは二つ
俳諧の本の事なほまじり也

昭信と申すは晩夏の日

高橋 松駿



一 編者曰人名録哉附せむとおとと素々此篇ハ
甘海翁此手に集り物より翁の没後遺稿
此おのれに有るを松田太人此校訂字を以
版より彫りぬより取調人名を録せむと以
一 第二編文章は投與此能君必郡交通知別
号は志す一何れはむことをとふ
一 編者追て廣く海内諸君此文章を何つめて
以て後人を俟つこれ拙き松青の偏り希望
せざる也所佳作は投與あむことを我
伏て致す

明治十六年六月廿九日出版御届
同年七月出版

東京府平民

編輯並
出版人

深谷恭輔

東京本所外手町
吉番地

定價廿五錢



